

稲作

本田管理スタート！異常気象に備えよう
水管理、雑草対策、栄養診断 こまめな稲体観察を

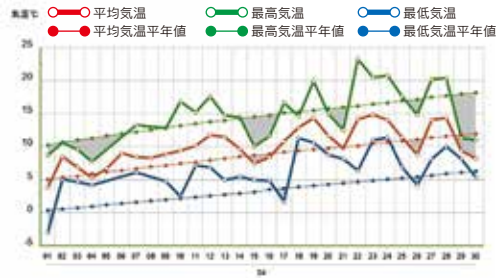
生育概況

今年の育苗は、浸種・催芽時の水温管理が徹底されたほか、気温が平年より高く推移したため、極端な出芽ムラ等はありませんでした。ただ、日照不足で推移したことで、無加温出芽では昨年よりも3〜4日程度、出芽に多く時間がかかりました。また、葉色はやや淡く、柔らかい苗質となりました。育苗期後半にムレ苗や苗立枯病、もみ枯細菌病が一部で発生しました。

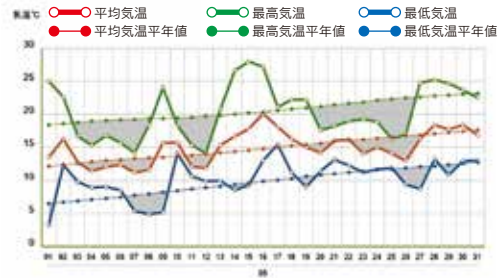
今年は雪解け後、曇雨天が続く、ほ場が乾きづらい状況が続いたことから、耕起作業は平年より1〜2日程度遅れましたが、田植え作業は5月25日に盛期(50%)を迎えました(平年比+1日)。5月中旬から好天となったため、活着が早く始まり良い初期生育が期待できます。

向こう3か月予報では、気温は高いと予報しており、特に6月の気温が高くなると予報していますので、異常還元(ワキ)や雑草対策を実施してください。

令和7年4月気温(大曲アメダス)



令和7年5月気温(大曲アメダス)



今月の栽培技術留意点

異常還元(ワキ)は
飽水管理で対策

有機物分解の過程で土中が酸欠状態になると根痛みの原因となる硫化水素などのガスが発生し、稲の生育に影響を及ぼします。堆肥など有機物を多く投入しているほ場を中心に、土を酸化状態にする水管理を行い、影響を軽減させましょう。



田植え後、稲の元気が無い、下位葉の黄化、褐点が見えだしたら…

ガス抜きと酸素供給

弱った稲体に栄養補給

飽水管理 もしくは水入れ替え
【生育停滞なら追肥】窒素成分 1kg程度/10a (硫酸5kg/10a)

雑草対策

春先から気温が高く推移しているため、雑草の生育も早まっています。取りこぼし雑草がないか、ほ場内をよく確認して早めの対策を取りましょう。斑点米カメムシ類の住みかとなる農道畦畔、休耕田の除草もこまめに実施し、発生密度を下げましょう。

夏に備える

長期予報では気温が高く推移すると予測しています。高温による影響は、生育ステージの前進や高温登熟のほか、雑草や害虫の発生があります。暑くなることを前提に稲の生育管理をしてください。省力化の時代ですが、稲の観察を忘れずに。

稲体の観察は基本

水管理で地温、稲体を冷やす

ケイ酸の中間追肥料実施

雑草が大きくなる前に散布

止め水期間の厳守

農道畦畔、休耕田の除草

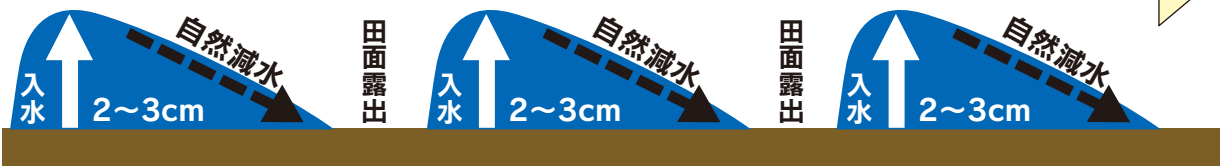
今月は水管理月間です

異常還元は「飽水管理」で抑える

これまで、中干しまでは常時浅水状態を保つようにしてきましたが、異常還元によるものとみられる生育停滞を防ぐため「飽水管理」に切り替えてください。「飽水管理」は、土壌の湿潤状態を保つ水管理で、土中の酸化状態(酸素が十分にある)を保ち、ガス抜きも実施でき、異常還元の影響を抑えることができます。飽水管理では、田面を露出させる期間を設けるため、特に高温時には、気化熱により地温上昇を防ぐことができ、根の活力維持が期待できるので、温暖化気候に対応した水管理といえます。また、異常還元を抑えることでメタンガスの排出も抑制できるため、地球温暖化対策にもなります。

今年は、気温が高いほか、前年のひこばえやワラ、春先の下草など、異常還元発生の材料と環境が整っています。「なんか稲の元気がないなあ」と感じ、ほ場に足を入れた時に泡がブクブクと出ているようなら、飽水管理か、水の入れ替えをしてください。除草剤散布期間を除いて、定期的に土中へ酸素を供給しましょう。

飽水管理のイメージ



この水管理を繰り返す

- ・土壌を湿潤状態に保ち、異常還元を回避しながら、土中に酸素を供給させる。
- ・常時湛水ではなく、一時的に田面を露出させる。
- ・田面にヒビが入るほどは乾かしすぎない。
- ・出穂前後は大量の水が必要になるため、3cm程度の湛水管理。
- ・登熟期間も飽水管理とする。
- ・除草剤等散布時は、止め水期間を守ってください。
- ・田面が柔らかくなりすぎないように注意。

適期に中干しを実施

近年は中干し開始時期が遅くなっています。中干しが後ろにずれると田面を十分に乾かせないほか、幼穂形成期と重なるため収量に影響が出かねません。中干しは条間・株間が見えなくなっているからではなく下表を目処に行いましょう。落水後も分けつは発生します。梅雨時期と重なりますので、余裕をもって深水管理、中干しを行います。

中干し要点

中干し期間は7〜10日程度

幼形期までには終える

田面亀裂1〜2cm

強い中干しはNG

目標莖数以上

ただちに中干しを行う

目標莖数確保

深水管理を行った後で中干しを行う

目標莖数未滿

有効莖確保後中干しを行う

346本/miの目安	
栽植密度	株あたり莖数
70株植	16〜17本
60株植	19〜20本
50株植	23〜24本

6月25日に調査をし、「あきたこまち」有効莖決定期の目標莖数346本/m²を確保できているかを確認します。

溝切りの実施

効率的な水管理ができる「溝切り」は高温下での稲作の必須技術です。溝切りは、中干し開始2日後頃の田面がやや軟らかい状態で行います。溝の交差部分と水尻は忘れずに繋いでください。乗用型溝切り機は少し水を張った状態で行うと作業効率が上がります。ほ場整備初年度や排水不良田、高低差があるほ場、水不足の懸念があるほ場では必ず溝切りを行ってください。溝切りは排水向上だけでなく、登熟期にかけて必要となる道筋です。



溝切りの効果

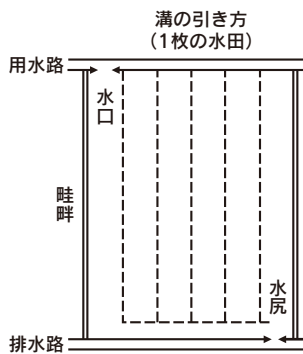
排水・中干しがスムーズに

高温時の効率的な入水

土中のガス抜き



溝の交差部分と水尻は必ず繋がります。



溝切りは排水の難度に応じて2〜3m(6〜12条)間隔で図のように引きます。



このページは秋田県農業共済組合との共同発行です。

倒伏軽減の一点観察

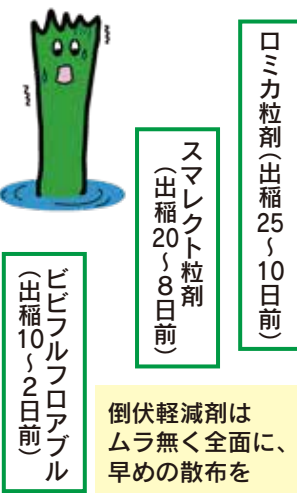
昨年は7月の長雨、高温によって節間が伸びたうえ、不十分な中干しによって下根の伸長がなかったことから、倒伏が多くなりました。同じ轍を踏まないために、まずは稲体の観察をしてください。6月25日頃の有効茎決定期と7月5日頃の最高分けつ期の草丈を比べてみて、15cm以内の伸長であれば、とりあえず「倒伏安全圏」です。事前に観察する株を設定しておくといです。その後、様々な条件によって倒伏が心配な場合は、倒伏軽減剤使用の検討をします。倒伏軽減剤は散布適期のうち早めの散布で効果が安定します。

稲体を観察しよう



自身のほ場に観察する株を設定し定期的に確認しましょう。

倒伏軽減剤の散布適期



まだ間に合うケイ酸

ケイ酸は幼穂形成期から吸収されていきますので事前に散布をしてください。ケイ酸を十分に吸収した稲は、異常気象下でも呼吸・蒸散機能が維持され気化熱により葉面温度の上昇を防ぐことができます。さらに、粉殻の結合を強くし割れ粉を防ぐことで斑点米カメムシ類による被害を軽減してくれます。倒伏軽減の効果もあることから、ケイ酸を継続的に投入している地域では高温でも品質維持しています。温暖化気候での稲作にはケイ酸が欠かせない必須成分です。



肥料名	種類	施肥量	施肥時期	施用効果
けい酸加里	ケイ酸 含有肥料	20～40kg/10a	幼穂形成期 まで	①倒伏抵抗性が高まる、②根の活力向上、③有効茎歩合向上、④登熟歩合向上、⑤食味向上、⑥病虫害被害の軽減、⑦葉身の老化軽減、⑧ワキの発生抑制
シリカ未来		1.4kg(1本)/10a (流し込み)		
K S K 2 8				
P K 4 0 号	リン酸 含有肥料	20kg/10a	9葉期 まで	異常還元等により、分けつが遅れている稲に使用。 ①根の活力向上、②有効茎歩合向上、③登熟歩合向上
マグコープ				

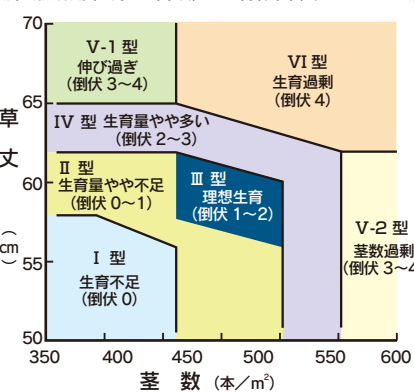
生育診断と穂肥

米の低タンパク化をすすめるあまり施肥チツソ量を減らしすぎて稲体が栄養不足になっていては、高温登熟を乗り切ることができません。高温登熟を見越した養分補給が必要です。一発型肥料は気温が高いほどチツソが早く溶出しますので、高温の場合、肥料切れとなった事例があります。一発型肥料を使用しても幼穂形成期に生育・栄養診断を行い、残存肥料予測や気象予報に応じた穂肥の検討をしてください。

生育・栄養診断の実施(あきたこまち)

項目	時期	最高分けつ期	幼穂形成期	減数分裂期
		最高分けつ期	幼穂形成期	減数分裂期
草丈(cm)	上限	52	65	75
	理想	48	60	70
	下限	45	55	65
茎数穂数(本/m ²)	上限	580	560	500
	理想	540	520	470
	下限	500	480	420
葉数	上限	9.8	11	12.5
	理想	46	44	40
	下限	44	42	38
葉緑素計値(SPAD)	理想	44	42	38
	下限	42	40	35

幼穂形成期(7月15日頃)の生育診断(あきたこまち)



穂肥肥料	施肥量	施肥時期	備考
穂肥555	現物7kg(N:1.05kg) 現物10kg(N:1.5kg)	出穂前15日頃	硫安系 15-5-15
穂肥V545			塩安系 15-4-15

葉いもち防除は予防第一

毎年、局所的にいもち病の発生が確認されています。箱処理剤や本田剤の使用により発生はかなり少なくなっていますが、いもち病は一度発生すると広範囲に感染が広がり、食い止めるのが難しい病気です。発生を見逃さず、早期防除が重要です。

余り苗は速やかに処分を

補植用余り苗は、育苗期防除や箱処理剤を処理していたとしても、ほ場にあるだけでもち病の伝染源となります。補植作業が終わったら、ただちに土中に埋没するなど確実に処分してください。

どんな品種もいもち防除を

WCSや飼料用米などのほ場でも、必ずいもち防除を行ってください。

葉いもち予防のための箱処理剤や側条施用剤を使用していない場合は、必ずオリゼメート粒剤を散布してください。

事前散布が予防の鉄則です

薬剤名	オリゼメート粒剤
散布時期	6月15日頃(6月12日~6月18日)
散布量	2~3kg/10a

近年のいもち病感染好適日初日

地区名	R2年	R3年	R4年	R5年	R6年
大曲	6月26日	6月23日	6月27日	6月15日	6月25日
角館	6月27日	6月23日	6月28日	6月29日	6月25日
田沢湖	7月5日	7月10日	6月24日	7月3日	6月26日

緊急対策時(例)	薬剤名(予防・治療剤)	散布時期	散布量・希釈倍数(散布液量)
	ブラシン剤(粉、フロアブル)	発生確認時	粉剤DL:3~4kg/10a フロアブル、ゾル:1,000倍(100~150ℓ/10a)
	ピーム剤(粉、ゾル)		

病斑を見つけたら、速やかに対策剤を散布します。耐性菌発生を防ぐため、同じ薬剤を連用せずローテーションで使用してください。

中後期除草と斑点米カメムシ類対策

昨年もノビエを中心とした残草量が多く、今年の雑草発生量が多いと予測しています。気温も高いため、除草剤の散布遅れとなつてしまつたほ場では早めに手を打つて、後発雑草を抑えなければなりません。後発雑草は稲の影に隠れて大きくなるため、発見時には手遅れというこもしばしば。溝切りや追肥、草刈り時に合わせてほ場内部の雑草発生状況を確認しましょう。

斑点米カメムシ類は雑草が多いところほど発生が多く、ほ場内に入させないためにも、ほ場内、他に、農道・畦畔・休耕田などの除草を地域でまとまつて行い、カメムシの繁殖地を無くすることが大切です。斑点米が多すぎると色彩選別機でも1回で取り除ききることができません。品質を落とさないために、雑草対策を入念に実施してください。



大豆情報

大雨時の排水と湿潤土壌対策のため、ほ場縁に明きよを施工し、必ず排水口に繋げ、速やかに排水ができるようにしましょう。用水路や水田隣接側には必ず明きよを施工します。明きよが施工できない場合は、3~4mほど離して播種します。

播種量

播種量は、播種時期が遅くなるほど株間を狭めて増量し、生育量(茎・莢数)を確保する必要があります。

病害虫対策

種子伝染性病害の発生を予防するため、種子更新は必ず行いましょう。紫斑病の種子消毒には、クルーザーMAXXを使用します。同剤は鳥害に対する忌避効果があるほか、初期病害虫(茎疫病、黒根腐病、タネバエ、ネキリムシ類、フタスジヒメハムシ、アブラムシ類)の同時防除が可能です。

播種時期	播種量(kg/10a)
6月中旬	5.3~6.6
6月下旬	7.5~10

クルーザーMAXX
・原液を乾燥種子1kgに対して8ml塗沫処理
・塗沫後はしっかり乾かすこと。